民家再生に学ぶ

Learning from Minka-Saisei

金子 晋也*

Shinya KANEKO

1 はじめに

本稿は、「民家再生」という建築思潮、および建築家の実践とその考え方に焦点をあてることで、「古民家再生から考えるまち・むらづくり」というテーマを横断的にとらえるためのひとつの視点を得ることを目的とする。

2 民家再生の動向

近年、「古民家再生」というテーマのもと、さまざまな建築家の実践がみられる。その背景には、民家を残したいという住民の要求とともに、民家再生という建築思潮の存在が指摘できる。これは、社会制度により促されたものではなく、その地域に住まう建築家による活動という点からも、建築分野でも独自の思潮といえる。

その特徴は、雑誌に掲載される計画趣旨や、再生という思想に関する論評によって記されている^{注1)}。しかし、民家再生に関する動向などを整理した資料がみられないため、本稿では、はじめに日本における民家再生の動向に焦点を当て、その建築思潮としての特徴を把握する。

まず、民家再生の事例を調べると、『住宅建築』誌の中にその事例の多くをみることができる(図1)。なかでも、『住宅建築』の1983年9月号の「和風特集：民家の再生・数寄屋造の家」という特集の、降幡建築設計事務所の再生事例5題に着目することができる。それ以前にも、同誌の中で民家を改修した事例は発表されていたが^{注2)}、「民家の再生」というキーワードや、まとまった建築手法として紹介され始めたのは、この特集以降である。

1983年といえば、日本では新奇な建築作品が多く発表された時代である。それらに比べ、「民家の再生」として紹介される降幡建築設計事務所の建築は、新規のデザインを避け、一見もとの民家と区別ができない意匠が多い^{注3)}。

加えて、当時は、古材を部分的に用いた、いわゆる民芸調の商業店舗が多く建てられ、民家が表層的なイメー

ジとして用いられていた時代である。降幡建築設計事務所に限らず、「民家の再生」として紹介される建築に対する建築的評価は難しかったと推測される。

しかし、建築史家の大河直躬は、降幡建築設計事務所の再生手法を、現代的な建築として高く評価している^{注4)}。このことによって、いかに民家を残すかという課題が認識されるようになり、さらには現代的な建築的テーマとしてもとらえられるようになったと考えられる。

また、『住宅建築』1984年11月号では、後に古民家再生工房という活動へ展開する、岡山県の建築設計事務所による再生事例が紹介されている。古民家再生工房は、それぞれが建築設計事務所を主宰する建築家のグループであり、その再生手法は「古民家の再生が重要であるとの共通認識」をベースとし、民家に新しいデザイン要素を加えることを共通の特徴としている。これは、降幡建築設計事務所と対照的な再生手法であるといえる。

建築ジャーナリストの平良敬一は、古民家再生工房の活動を「モダンヴァナキュラリズム」と表し、現代の建築思想という観点からその設計活動を評価することで、民家再生をモダニズムという建築一般の枠組みの中にも拡張してとらえている^{注5)}。

さらに、吉田桂二や安藤邦廣のように日本の建築文化のなかで民家再生をとらえようとする建築家や、近年では現代的な作風の建築家の中にも、独自の視点から民家再生の実践を試みるものも多い。

このように、1980年代以降の建築ジャーナリズムの中で民家再生は現代の建築思潮として位置付けられ、その思想は建築分野においても広がりを見せている。

3 民家再生の実践

次に、建築家による民家再生の実践をとらえる。一般に、建築家の仕事は、設計者として発注者と施工者との間に入り、建築工事の計画および管理を行うことである。再生工事では、これら計画の前に既存の民家の調査が加

*札幌市立大学デザイン学部 Sapporo City University, School of Design, Assistant Professor

Key Words : 1) 民家再生, 2) 建築家, 3) 建築空間, 4) 建築意匠

わる。これは、構造部材や既存の建具などの現状を把握することが目的であり、保存や復元を目的とした調査とはその性格が異なる。

また、その調査で、建築家は現状を記述するだけでなく、その作業の中でデザインの着想を得ることが、再生工事の調査に関する記述からもみることができる（表1中1-1, 1-2）。なかには、採取した野帖から、建築図面だけでなく骨組み模型を作成する事務所もある。

このことから、建築家は、調査や図面・模型の製作を通して、民家の持つ部材の特徴や寸法体系を身体的、客観的に把握していると考えられる。

それでは、民家再生ではどのような考え方を示すのか。以降では、地域に根ざした活動を行っている建築家の事例として、降幡建築設計事務所と古民家再生工房の事例を中心に扱い、その建築空間と建築意匠から民家再生の特徴を検証する。

4 民家再生の建築空間

民家再生における建築空間というと、図2の写真のように、暗い民家の屋根裏に、トップライトから光が差し込むことで、梁組が象徴的に浮かび上がる場面をイメージできるであろう。あるいは、玄関や縁側などを整備した、端正な外観を思い浮かべることができるが、ここではこのような知覚的な意味合いでの空間ではなく、生活との関わりからとらえられる建築空間に着目し、建築家による計画からその特徴を把握する。

まず、降幡建築設計事務所の初期の再生事例「草間邸」（図2）をみると、座敷やオエといったもとから形式性の強い空間は維持し、ウラゲンカンやマヤなど本来土間であった大きな空間は玄関や納戸、水回りなど現代的な部屋に再構成するなど、各部屋の配置にみる機能的な平面計画が特徴としてとらえられる。また、南面のコザシキ部分を撤去することで採光と通風を確保するなど、文化財にはみられないような大胆な改修も行っている。

古民家再生工房の場合も、平面計画に同様の傾向がみられる。例えば、「庄原の家」（図3）では、座敷は維持しているが、裏手を寝室や水回りなどの現代的な部屋に再構成し、もとの土間は、茶の間、居間、台所、サンルームといった生活の拠点として転用している。

両者の平面計画には、民家でも本来的に生活領域であった土間や裏手を改変し、接客も兼ねる座敷やオエなど形式的な空間は維持するという共通した志向が見出せる。

しかしながら、それぞれの平面計画には異なる特徴がある。例えば、もとの土間の空間を比較すると、「草間邸」はホールを中心として各部屋を配置した求心的な平面計画であるが、「庄原の家」では、茶の間を中心に置いた

回遊式の平面計画となっている。

このことから、土間のように大きな空間は、現代的な生活に合わせた小さなスケールに分割する点で共通するが、ホールを中心とするものや回遊式のものなど、生活に合わせた平面計画が想定されていることがわかる。

また、民家の空間を小さいスケールによって再構築するという観点からみると、屋根裏の空間に同じ志向をみることができる。例えば、「草間邸」では、寝室と子供部屋が設けられており、「庄原の家」では屋根裏部屋が設けられている。研究者で建築家でもある安藤邦廣は、「外部から守られた安らぎのある屋根裏の寝室」という表現によって、屋根裏部屋から新しい生活像を創造している^{注6)}。

以上のような民家再生の建築空間の特徴は、土間のように比較的大きな空間を現代のスケールに対応した部屋に分割し、その配列を再構成する点や機能を転換する点において、建築家を通じてあらわれる現代の生活像を示すといえる。

5 民家再生の建築意匠

ここでは、先述した民家再生の建築空間のなかで、どのような建築意匠の特徴があるか整理する。

まず、降幡建築設計事務所の再生事例では、新しく加えた部分についても、極力もとの部材となじませる様に古色塗りを施すことで、もとの民家と新しく加えた部材の調和を試みている（表1中2-2）。

このような再生手法は、その建物や地域にある形式になじませることで、民家自体を漸進的に現代に位置付けようとする考え方としてとらえられる。

一方、古民家再生工房は、これとは対照的な再生手法をとっている。表1の（2-3）は、古民家再生工房の矢吹昭良によるテキストであり、そこから建築家が意図的に新しいデザインを混在させていることがわかる。

具体的には、図3の写真のように黒い梁組が表出する吹き抜けに、シックイで塗り固められた閉鎖的な壁面を配置している。これは、吹き抜け／閉鎖的な壁、黒い梁組／シックイといったように、もとの民家の要素と新しく加えた要素が、形や色の水準で対比している。また、新しく加えた要素の中でも土とシックイという、肌理の異なる材料の壁を用いることによって、梁組とシックイ壁という単純な対比を回避している。

また、古民家再生工房の萩原嘉郎は、このような再生手法を「時間の視覚化」というコンセプトとしてとらえ、素木／古木、ほぞ穴、部材のプロポーショナルなど、既存部材と新しく加えた部材の状態を対比させることで民家再生の建築意匠の展開を試みている^{注7)}。

この他にも、建築家の吉村篤一、中村好文などが工業製品を新しいデザイン要素として取り入れた再生を行っている。そこで用いられる素材は、アルミニウムなど光沢のない質感であり、もとの民家に対して素材の質感を工夫する建築家の様子がうかがえる（表1中2-4, 2-5）。

このように、民家に新しいデザイン要素を加える再生手法は、部材の状態や素材の時間的差異によって建築意匠が際立つものである。これは調和を試みる建築意匠とは異なる水準で、民家再生の考え方を表現する特徴のひとつであるといえる。

このような民家再生の建築意匠の特徴は、民家を現代の建物として位置付けるため、時間の隔たりを如何に表象させるかという建築家の設計意図を示すといえる。

6 民家再生に学ぶ

以上のように、本稿では建築空間と建築意匠から、民家再生の実践を把握してきた。そこにみられた現代的な生活像やデザイン要素は、大河直躬が「ひとたび建築家の心のなかをくぐり抜けた再生民家が、以前とは異なる美を獲得していることは、だれも否定できまい」と記したように、建築家が民家の生活美や、古材の美しさなどを新たな形で提示したものであるといえるだろう。つまり、民家再生は、建築家という媒体により見出された民家の姿であり、民家を主題とした創作活動ととらえることができる。その際に、建築家は、そこにある民家本来の美を抽出し、現代的な感覚で変換する仕事を行っていると考えられる。それゆえ、建築家は、民家を再生することに対して謙虚であり、挑戦的でもあるのかもしれない。

また、このような建築家の役割と同時に、現代の生活やデザイン要素を許容する民家本来の空間の豊かさに着目する必要がある。民家は、その地域に残る慣習や風土に根差した住まいである。建築家は、そのなかでも、使われる材料や技術などの即物的な情報を、現地調査や実測調査を通じて客観的な事実として把握し、新たな建築空間や建築意匠の発想の源としていえると考えられる。

このように民家自体を豊かな情報源ととらえると、その見方は画一的なものではなく、多様に解釈することができるだろう。極端にいうならば、民家はその地域に残

る慣習や風土のデータベースであり、その空間を体験した人であれば誰でも、それぞれの視点から、その活用方法について考えることができるものといえる。そのことが、その土地に残る民家を重要な資源として、あるいは研究のフィールドとして現代に蘇らせるのではないだろうか。

民家再生に学ぶことは、民家が重ねてきた時間と現代生活との限らない応答と、それを乗り越えようとする思想にあり、その考え方には次世代の地域を創造する萌芽を感じることができる。これは、建築分野に限らず、様々な分野の発展にも寄与すると思われる。

以上、民家再生について、建築思潮の動向と建築家による建築空間と建築意匠の実践から、その特徴を概観することができた。今後も「古民家再生から考えるまち・むらづくり」というテーマから、研究や実践が積み重ねられることが望まれる。

注

注1) 参考文献3)～5)の巻頭論文。

注2) 例えば、「角田山妙光寺客殿（東京工業大学茶谷研究室）」が1982年の新建築誌（参考文献1）に「民家の再生」として掲載されている。

注3) 参考文献3)のp6で、大河直躬は降幡の創意や創造について、「独特の部分的な意匠を見出すのは困難である」と記している。

注4) 参考文献3, pp4～5

注5) 参考文献5, p7

注6) 参考文献6, p107

注7) 参考文献8, p50

参考文献

- 1) 新建築, 新建築社, 1982.3, pp207～220
- 2) 大河直躬: 本棟造と現代建築, 住宅建築, 建築資料研究社, pp.6～7, 1983.9
- 3) 民家の再生—降幡廣信の仕事—, 建築資料研究社, 1989.7
- 4) 民家再生—事例集・1—, 建築資料研究社, 1996.11
- 5) 民家は甦る—岡山「古民家再生工房」の軌跡—, 建築資料研究社, 2003.3
- 6) 安藤邦廣: 住まいを四寸角で考える, 学芸出版社, 2005
- 7) 降幡廣信: 民家再生の設計手法, 彰国社, 1997
- 8) 古民家再生工房: 古民家再生術, 住まいの図書出版局, 1995

Summary: This paper is aimed to obtain an idea of refurbished traditional timber houses -it called Minka Saisei- for cross-sectional discussion of the theme. Firstly it grasped the case from "Jutaku-Kenchiku" architectural magazine since 1980's. And it is shown that Minka Saisei is positioned in the architectural movement by various architectural practicing. Secondly, it is aware of the characteristics of architectural space and architectural design through the works; Furihata Architecture and architect group Kominka Saisei kobo. It shows the image of modern lifestyle and senses through the architect. It can be said that characteristics of Minka Saisei, and there is extracted by passing the mind of architects, the beauty of Minka. At the same time, it is shown the richness of the space of the original Minka that allows the design and modern life.

Key Words: 1) Minka-Saisei, 2) architect, 3) architectural space, 4) architectural design